

聖書:エステル記2章12～23節

説教:主の命令に従う

はじめに

いまからおよそ二千五百年前、当時世界最大の帝国を誇っていたペルシャのクセルクセス王は、王妃ワシュティが王の命令に従わなかったことに腹を立て、ワシュティを王妃の位から退け、その代わりとなる女性を國中から捜そうとします。そのとき、名もない一人の女性にしか過ぎなかったエステルが候補者のひとりとして選ばれ、今日のところを読んでおわかりのとおり、エステルはクセルクセス王の好意を得て、王妃の冠をかぶることになります。何も考えなければ、これはシンデレラストoryーそのものですから、「やっぱり美人は得だよ」という話で終わりそうです。もちろんそんな話しではありません。このときエステルとモルデカイは信仰者として、どのような思いで歩んだのか、どのような神の配慮が働いていたのか。そこに目を留めながら今日の箇所を見てまいります。

1 エステル

1) 好意を受けて

12節以降を読むと、スサの城には二つの後宮があったことが書かれています。全国から集められた候補者は、第一の後宮に入れられ、そこで一年間の準備期間を経てから順番に王の前に出て行き、王の前から戻ると第二の後宮に帰って行く。もしも王の気に入られなかったなら、二度とそこから出られない。そのようなシステムになっていました。ですから、競争相手を蹴落としてでも王の寵愛を勝ち取らなければならない。そんなドロドロの世界だったでしょう。そんなところへ投げ込まれてしまったエステルはどうしたか。

15節。「さて、モルデカイが引き取って自分の娘とした、彼のおじアビハイルの娘エステルが、王のところに入って行く順番が来たとき、彼女はわたしの監督官である、王の宦官ヘガイの勧めたもののほかに、何一つ求めなかった。こうしてエステルは、彼女を見るすべての者から好意を受けていた。」

他の女性たちが、王に気に入られようとたくさんの宝石をつけたり、着飾ったりしていたのに、エステルはいっさいそういうことはせず、ただ言われたとおりのものを身につけて王の前に出て行った。そうしたら王はそんなエステルを見て大いに気に入り、王妃に選んだ、というのです。

2) 望まないで後宮に連れて来られる

なにごとくも欲を出してはいけない、そうすればよいことがあるという教訓話なのでしょうか。事情はもっと複雑でした。

少し話を前に戻します。王妃となる女性候補を集めるために、王は法令を出し、担当の役人まで任命しました。どうやって集めたのかは書きません。自由応募だったかもしれませんし、役人が町を探してこれと思う候補者がいると、本人が行きたくないと言っても、これは王の法令であるからと言って強引に連れてきた。その両方のケースがあったと思われる。ではエステルはどちらのケースだったのか。本人の意志に関わらず連れて来られたと考えられます。理由がある。

3) ユダヤ人として自覚と悩み

20節を読みます。「エステルは、モルデカイが彼女に命じていたように、自分の生まれも自分の民族も明かしていなかった。エステルはモルデカイに養育されていたときと同じように、彼の命令に従っていた。」

エステルは小さな子どもの時に両親に死に別れ、親戚のモルデカイに引き取られて養女として育てられてきました。そのモルデカイは信仰者ですから、エステルを育てるにあたって、「あなたは民族としてはユダヤ人の血筋である」と教え、当然のように聖書も教え、ただ知識として教えるだけでなく、聖書のみことばに従うことをたたき込んだはずで、ですから、「彼の命令に従った」とは、モルデカイであることはもちろんですが、主の命令に従ったと言い換えることができるでしょう。

そんなエステルが読んでいた聖書の申命記申命記7章3節にはこう書いてあるのです。「異邦の民に自分の娘を嫁がせてはならない。」エステルが自ら進んでコンテストに応募したのではないというのは、律法があるからです。ところが、容姿が美しいということで無理矢理に後宮に送られてしまった。それでも心の中では、「どうか王妃に選ばれませんように」と祈ったでしょう。それが周りからは欲がない、謙遜で控えめな態度に見えたということなり、かえってそれがあだとなり、異国人であるペルシャの王の妃とならなければならない。なんとも皮肉な結果です。

## 2 モルデカイ

### 1) 王の門のところに座る

では、エステルへの育ての親であるモルデカイはこのときどうしていたのか。21節。「そのころ、モルデカイが王の門のところに座っていると、入り口を守っていた王の二人の宦官ビグタンとテレシュが怒って、クセルクセス王を手をかけようとしていた。」

エステルが王妃となった一方で、それとはまったく関係がない事件のことが突然出てきます。当時、王の門の前では重要な裁判や調停が行われていたと言われていました。ですからモルデカイが王の門のところに座っていたというのは、彼が王宮の中で重要な地位にあったことを示している。それで、いろいろな情報に接する立場にもあった。二人の宦官のクーデター計画を事前にキャッチできたのも、そのためだったのでしょうか。

### 2) 王の年代記に記録された

この計画を知ったモルデカイは、すぐに人を遣わしてエステルに知らせ、エステルを口を通して王の耳に入りました。これを聞いた王はすぐに事件の調査を命じ、真相が明らかになり二人は処刑され、この一連の出来事は「王の前で年代記に記録され」ました。ここだけ読めば、たまたま一つの事件が王宮の中で起きたけれど、未然に止めることができた。そんな話で終わりです。

ところが、エステル記全体読んでいくと、このことが実は神の重大な備えのひとつであったことに気がつくのです。先取りして言えば、この事件は明らかにモルデカイの手柄であったのですが、王はこのときなぜかモルデカイに対して何も報償を与えず、そのまま放ってしまう。ところが後になって、王がこの年代記を読み直して、そう言えばあのときモルデカイに何もしていなかった、これはいけない。早速モルデカイに最高の栄誉を与えなければと、王がこの事件を思い出す。その思い出したタイミングというのが、まさにユダヤ人大虐殺計画が実施されるかどうかギリギリの瀬戸際の時。王がこの事件のことを思い出したことによって、すべてがひっくり返されていく。それほど大きな備えであった。そのことはまた後で詳しく触れることとなります。

## 3 主の命令に従う

### 1) この世の王に従ったのか

モルデカイは信仰者ではありませんでした。エステルが後宮に連れて行かれたとき、そして王妃に選ばれ

たと聞いたとき、モルデカイはどんなことを考えていたのでしょうか。もしモルデカイが神中心ではなく、もっと自分中心の人であったならどうなっていたか。そう考えてみるとわかりやすい。モルデカイにしてもエステルが後宮に閉じ込められていることは大変な苦しみです。エステルを助けたい。どうしようかと思っていたらちょうどそのとき、二人の宦官が王を殺そうと相談しているとの情報を手にする。よしこのチャンスを逃してはならない。二人をうまく使って、王を倒そう。そうすればエステルを助け出すことができる。そんなことを考えてもおかしくない。

ところがモルデカイは、二人の宦官のことをエステルを介して王に報告するのです。なぜでしょう。やっぱり、モルデカイは神よりもクセルクセス王に従っているのでしょうか。いいえ、そうではありません。モルデカイは、どんなに脅かされようとも常に神を信じ、神に従っており、そこがぶれることは絶対にありません。ではなぜこのような判断をするのか。

### 2) この世と調子を合わせて（従って）はいけません

ローマ書12章2節にこうあります。「この世と調子を合わせてはいけません。むしろ、心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。そうすれば、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に喜ばれ、完全であるのかを見分けるようになります。」

これだけ読めば、モルデカイは「この世と調子を合わせて生きている」人に見えるかも知れません。パウロが言いたいことはそうではない。積極的に進んで調子を合わせるのはいけなくて、王の法令のような国の法律を守らなければならないときは、それを守る。それは決してこの世と調子を合わせることはならないので、安心してよい。とは言っても、そんな簡単に割り切れるわけではありません。例を挙げましょう。お役所に提出する書類に年号を記す欄があります。令和、平成、昭和はあるけれど西暦がないとき、困ってしまう。小さなことかも知れませんが、やっぱり信仰者として引っかかりを感じてしまうのです。

### 3) 神のみこころを見分ける

実はそこが重要なことなのではないでしょうか。パウロはこう語っています。「むしろ、心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。」

このような訳すと、自分の力で心を新たにしなければと読んでしまうので、悩めます。むしろこう訳したほうがわかりやすい。「心を新たにされることで、自分を変えていただきなさい。」その結果、あなたは神のみこころが何かを見分けることができるようになる。そう言っている。そこで問題は、どうやったら心を新たにされるのか、どうやったら自分が変えられるのか。そのような間に行き着きます。まさに私たちはこのことでいつも悩んでいます。

モルデカイが、二人の宦官が王を殺そうと企んでいるのを聞いたとき、彼は神のみこころが何かを正しく見分けることになり、その結果、後になって大きな救いを経験する備えとなりました。なぜそうできたのか。エステルが王妃に選ばれる。あまりにもありえないことが起きたのです。わかりやすく言えば、宝くじに当たるのよりももっと小さな確率です。単なる運がよいという話しではない。信仰者であるならば考えます。これは、何かはまだ知らされていないけれど、神が働いておられることではないか。モルデカイはそこに目を留めています。

でも、神のみこころは何かを考え続けること、神が物事の背後に働いておられることを信じ続けることは、決して楽な事ではありません。モルデカイもエステルも、神のみこころが何かを考えながらも、一方では異邦人と結婚しなければならないという苦しみを味わうのです。無駄な苦しみでしょうか。そうではない。この二人が神を信じながら苦しみを忍耐していくときに、神の手で変えられていったのではないのでしょうか。初めはぼんやりとしか見えなかった救いが、はっきり見えるようにされていったのです。

イエス・キリストはどうされましたか。罪に満ちた世に来てくださり、父なる神を信じ、神のみこころを成し遂げるために、この方は苦しみを味わってくださったのです。私たちもまた主の御跡をたどりながら、この一週間を歩んでまいります。